



● 若手交流オンラインセミナーの運営に寄せて

公募 B 班 研究協力者 宮田 潔志

いまだ収束の兆しを見せない COVID-19 の状況に鑑みるに、大人数で集合してオフラインの学術集会を行うことはしばらく不可能に近い状況が続くだろう。2020 年の秋の学会シーズンでは、多くの学会がオンラインで開催されていた。いわゆる講演と質疑応答だけであれば、オンラインでも議論が可能であるという感触を得た研究者も多かったのではないだろうか。一方で、ポスター発表や懇親会など、対面で少人数での密なコミュニケーションが本質的に重要なアクティビティには難しさを感じる場面も多かった。特に、学生や若手研究者にとって極めて重要な「切磋琢磨する同年代の研究仲間を見つける」という側面が、オンライン化で大きく削減されている事実は疑いない。この由々しき事態は、新学術領域内の若手研究者育成の観点でも影を落としている面もある。この文書は、そのような状況に光を射すべく企画された「若手交流オンラインセミナー（2020 年 12 月 12-13 日）：共同研究提案グループワーク」の開催に至るまでの経緯と、終えてみての雑記である。

9 月の中旬だったのだろうか、本オンラインセミナーの運営幹事が、幹事長を務めた坪ノ内優太助教（八木研・C 班）を中心として組織された。坪ノ内助教および木下雄介助教（民秋研・A 班）・鈴木肇助教（阿部研・C 班）・山口友一助教（工藤研・C 班）と宮田（恩田研・B 班）の 5 人で運営する運びとなった。私にとっては、そもそも初対面の先生方も多かった。ただ、初回のミーティングから不思議と打ち解けて、自由闊達に意見交換できた。自由に企画をしてよいということだったので、普通のオンラインの講演会をやるだけでは面白くない、という点で意気投合し、「学生・若手同士の“密”な交流をオンラインのアクティビティで可能にできるか」といった挑戦をすることとなった。2-3 週間に一回のペースで議論を重ね、最終的に「異分野メンバー3-4 人のグループに分け、集中的に議論して班のメンバー構成ならではの共同研究案を制限時間内で作成し、発表しあう」という構想が固まった。

会のプログラム概要は次のとおりである。一日目の午後から開始し、まず口頭発表を希望した 11 人の参加者の口頭発表を、いわゆるオンライン講演会の形式で行った。そののち、グループワークを行う班員の顔合わせを行い、自己紹介とともにそれぞれの「得意技術」「困ったこと」を共有し、一枚のスライドにまとめてもらった。このスライドを、グループワーク時の発想の起点にしていた。班のメンバーは A, B, C 班が極力バランスよくなるように配置したため、ほぼす

べての班が初対面のメンバーで構成されることとなった。二日目は朝にポスター発表が 21 件あった。この時、班の構成員の研究を把握できるように班員のメンバーのポスター時間が被らないようにポスターの発表枠を調整した。そして、午後からがいよいよグループワークと、そこで生まれた研究提案の発表会である。なお、ポスターやグループワークは、Zoom のブレイクアウトルーム機能を駆使して行った。

初対面の 4 人が集まって共同研究を考えてスライドを作るという作業を、2 時間という限られた時間で達成するのは容易なことではない。企画しておきながら、いったいどうなることかと気を揉んだが、各班にファシリテータとして進行役をお願いしていた助教の方々がうまくまとめてくださっていたおかげで、どの班も形にすることができていた。全部で 7 班の研究提案を一班 15 分の持ち時間で発表しあい、最後に参加者全員から「迫力があつたと思う発表」を 2 つ選ぶ形で投票してもらった。中にはとても 2 時間で用意したとは思えないハイクオリティなスライドと発表を繰り出した班もあり、予想を上回る発表会となった。得票数をベースにして、優勝・準優勝の班を表彰し、表彰された班には賞品も用意した。その後はそのままバーチャル懇親会という流れだった。この懇親会には、Web ツールである Gather.town を使用し、オンライン上で立食パーティのような空間を演出した。

初対面でも、2 時間で共同研究提案のスライドを作るとなると即席のチームワークが問われる。コミュニケーションをためらっている時間も惜しい、ある種の極限状況に強制的に置かれたため、タイトなスケジュールがかえって相互交流のカンフル剤になっていた印象を持った。かなり疲れたが、とても楽しかったという声を複数の参加者から聞いた。運営としては大変ホッとしたというのが素直な感想である。エンターテインメント性を盛り込んだ企画となっていた点は参加者にも良い形で伝わっていたようで、懇親会で、参加した学生から「即席の料理対決番組みたいだった」という意見もいただいた。言い得て妙である。

事後アンケートの評価も、ほぼすべての参加者が「参加してよかった」「友達ができて楽しかった」と回答してくれており、運営冥利に尽きるコメントを多くいただけた。オンラインだと密なコミュニケーションが難しい、というのが定説にも感じるが、意外とその壁を壊すのは可能なのかもしれない。次回機会があれば、さらに本格的な共同研究を立ち上げられるような、もう一段階上の交流イベントにも挑戦してみたい。

新学術領域「革新的光物質変換」ニュースレター
 第 4 巻・第 1 号（通算第 37 号）令和 3 年 1 月 4 日発行
 発行責任者：沈 建仁（岡山大学 異分野基礎科学研究所）
 編集責任者：八木政行（新潟大学 自然科学系）
<http://photoenergy-conv.net/>